



医療・介護分野の従事者をはじめ市民ら50人が参加した

- （参加した市民からの感想）
- 「もっと使用する人のニーズに合ったトイレを製作するべきだと思った」
 - 「多くの方に聞いてもらいたいと思った。いろんな地区で企画して欲しい」
 - 「避難する事態でトイレはみんなが直面する課題だが、恥ずかしさもあり、大きな声では言いくらいの問題だと思う。このようなお話を聞く機会を得ること、行政に動いてもらうことはとても大切だと思った」

【西宮市・半田医院 半田 伸夫】

小雨交じりの10月18日土曜日、標記市民公開講演会に参加した。講師は日本トイレ研究所 代表理事である、加藤篤氏である。加藤氏は1972年愛知県のお生まれで、1996年芝浦工業大学を卒業され、都市建築などに興味を持つておられた。そのなかで建物の中で、必要不可欠の最小単位であるトイレに興味を持ち、トイレと、排泄に関することを専門にしようと考え日本トイレ研究所を立ち上げ、今日に至っている。

私は、災害時人々が最も困っていることが、水とトイレであり、災害時のトイレ問題に取り組んでいる方々を調べる中で、加藤さんことを知った。阪神・淡路大震災から30年経つて、トイレ問題がどの程度進んでいるのかと、加藤さんの話を楽しみにしていました。結果はどうだろう。残念なことに、移動式簡易トイレが災害現場に届くまで、最低3日、へたをすれば1か月かかる。その現状は30年経つてもあまり進展が見られない。さらに避難所のトイレ汚染の問題は、昨年の能登半島地震でも同じことが繰り返されていました。

西宮・芦屋支部は10月18日（土）、西宮市プレラホールにて第45回となる支部総会を開催。記念講演として、日本トイレ研究所代表理事の加藤篤先生を講師に市民公開講演会「災害時にも安心できるトイレ環境づくり、トイレで困る人を減らすために」を開催。会員・市民ら50人が参加した。

司会を務めた西宮市・半田医院の半田伸夫先生の感想を紹介する。



加藤篤さんが震災時の「トイレパニック」について解説



総会議事では2024年度の支部の取り組みを振り返るとともに2025年度活動方針が確認された

（評議員）
上田 進久、坂尾 将幸
土山 雅人、林 功
宮崎 瞳雄
〔歯科〕 藤森 隆史、加藤 茂芳
（予備評議員）
岩下 敬正、川野 悅司
北垣 幸央、川崎 史寛
前田 信証、三浦 一樹
森 博雄、浦 克明（新）
〔歯科〕 小田 泰史

西宮・芦屋支部
新年度役員一覧（敬称略）
（支部長）法貴 憲
（副支部長）伊賀 幹二、加藤 隆久
林田 英隆、半田 伸夫
広川 恵一、村上 博
（世話人） 多田 梢、上田 進久
坂尾 将幸、土山 雅人
林 功、宮崎 瞳雄
藤森 隆史、岩下 敬正
川野 悅司、北垣 幸央
川崎 史寛、前田 信証
三浦 一樹、森 博雄
安岡 真奈美、佐々木 健陽
（相談役） 北井 明、法西 浩

第45回支部総会・記念講演会（感想文）
災害時にも安心できるトイレ環境づくり、トイレで困る人を減らすために

県庫医協会 芦屋支部ニユース

No. 378
2025・11・25

行

〒662-10832
兵庫県西宮市甲風園1丁目1-5 法貴ビル2F
法貴皮膚科内 兵庫県保険医協会
078(393)1801

兵庫県保険医協会 西宮・芦屋支部

「トイレパニック」対策 医療者から声を上げて

総会議事には6人が参加し、2024年度の会務報告、2025年度の活動方針案を採択。また、次年度の役員（左記）を選出した。

国際部／西宮・芦屋支部 市民公開講演会（感想文） 報告 ウクライナ被災市民の現在と私たちにできること

被害続くウクライナに関心失わないで

協会国際部と西宮・芦屋支部は9月20日、協会会議室にてポーランド在住のジャーナリストでルポライターの丸山美和さんを講師に市民講演会「報告 ウクライナ被災市民の現在と私たちにできること」を開催。会員・医師ら27人が参加した。司会を務めた半田伸夫先生の感想を掲載する。

2025年9月20日、お彼岸前だと言うのにまだ暑い土曜日に、上記市民公開講座が開催された。講師はポーランド在住で、国立ヤギエウオ大学でジャーナリズムと社会コミュニケーションを教え、自身もジャーナリストとして、ウクライナ難民支援活動に携わっている丸山美和

さんである。毎年一時帰国されており、協会会議室にてポーランドに避難した

昨年も講演していただいた。

戦争が長引き、ポーランドに避難した

ウクライナ被災市民の数も増えるに従い、

両国市民の間には徐々に軋轢が生じてき

ている。ひどいときにはウクライナヘイ

ト運動も起こっているという。学校での

ウクライナ人差別、いじめ、言葉の壁な

ど、多くの問題をかかえて、危険を承知

で帰国する人も多い。

丸山さんは、そんなウクライナの現状

を見るべくキエフに向かったところ、滞

在したホテルのすぐ近くでロシアのドロ

ン攻撃を経験した。当初状況が理解でき

なかつたが、分かったとたんに震えがと

らなくなるほど恐怖を覚えたという。

ウクライナ政府も兵士の確保に困窮して

いて、路上を歩いている男性がTCKと

いう機関に拉致され、簡単な訓練で前線

に兵士として送り込まれ、遺骨となつて

帰つてくることも増えているという。ポー

ランド内部でも右派の大統領が選任され、

ウクライナ政府と距離を置こうとする動

きもある。ロシアの側の正当性を理解す

る人もいるが、丸山さんはすべてロシア

ウクライナの現状を理解する動

きとなる。

ウクライナの人々の暮らしなどのパネルを展示。

地域住民・患者との交流を行つた。

また、

「OTC類似薬」とされた医薬品の

保険外しの問題や、病院・診療所の経営危

機についても紹介。医療の抱えている問題

を患者・市民の方々と共有できる貴重な機

会となつた。

会となつた。

参加した市民からは「震災当時は東北に

ボランティアで行つていたが、そのときだけ

になつてしまつた。こうした継続した取り組

みがあることを知り、当時を振り返ること

ができた」「チラシを見て、ウクライナの方々

のアクセサリーが気になつて初めて参加し

た」などの声が寄せられた。

日本から遠く離れたウクライナの支援を

するぐらいなら、能登の被災地支援にもつ

と資金援助すべきとの意見もある。そのこ

とに異論はないが、日本も国際社会の一員

であり、正しい情報を得る機会は極めて大

事なことだ。そんな機会を摘み取つてはい

けない。今回の講演は非常に貴重なものだ

と感じた。【西宮市・半田医院 半田伸夫】



丸山美和さんがウクライナと避難民のリアルな状況を話した

第18回被災地交流 物品／物産展

楽ししながらも震災について考える機会に

協会西宮・芦屋支部は11月8日(土)、広川内科クリニックで18回目となる被災地交流／物産展を開催。恒例の気仙沼市の「かけあしの会」から新品種のぶどう「マスカ・サーティーン」やりんご「シナノ・ゴーリード」といった果物を中心に東北の物産品が販売されたほか、能登半島地震被災者の方々が使わなくなつた漁網を編んで作ったサコッシュ、ロシア・ウクライナ戦争によりボーランドに避難しているウクライナ出身アーティストの作品などを販売した。また震災アスベスト曝露問題や被災地訪問などの協会の取り組みや、福島第一原発周辺での量線率測定の記録、戦時下でのガザに住む女子学生と母親の日記、川口・蕨の

会とつながる。ボランティアで行つていたが、そのときだけになつてしまつた。こうした継続した取り組みがあることを知り、当時を振り返ることができた」「チラシを見て、ウクライナの方々のアクセサリーが気になつて初めて参加した」などの声が寄せられた。

- ①世話人会の日程は毎月第4金曜日です。
- 次回は11月28日(金)に予定しております。支部についてのご意見や企画案などをお寄せください。



賑わいを見せる「かけあしの会」
東北物産の販売(上)／能登半島・
ウクライナの作品展示・販売(中)
／ガザのいまを伝えるパネル展示
(下)

世話人会だより